なやましむる事あり、余が故郷にて、鼬鼠誤て造酒家の六尺桶の中に陷り、出るに便なく、最後屁を放たるに、其臭氣數十日に及べども消ずして、これに酒を釀る事あたはざりき、

〔駿臺雜話 二〕朝がほの花一時　翁も其歌にならひて〇略歌

まことに、世話にいふ兎唇の嘯も心なぐさみにて侍る、各さぞおかしくおぼすらめ、たゞ詞をすてゝ、意をとり給へかし、

〔瓦礫雜考 下〕尻尾を見せぬ

陸游が姚平仲小傳に、西子入五湖、姚平仲入青城山、它年未必不死、直是不見末後一段醜境耳、故諺曰、神龍使人見首而不見尻などあるも、似たるやうなり、但しこゝにていふは、狐狸のたぐひ、物に化をふせて、終に本身を顯さぬ事をいふ成べし、

〔平家物語 四〕大衆そろえの事

きうてうふところに入、入りんこれをあはれむといふ本文有、自餘は左らず、きやう左うがもんとにおいては、今夜六はらにをしよせて、討死せよやとぞせんぎしける、

〔平家物語 五〕かんやう宮の事

其中に花やう婦人とて、ならびなき琴の上手をはしき、凡此后の琴のねを聞ば、たけきものゝふのいかれる心も和ぎ、とぶ鳥も地にをち、草木もゆるぐ計なり、〇下略

〔平家物語 五〕もんがくのあら行

大みね三ど、かつらぎ二度、高野、こ川、金峯山、白山、立山、ふじのたけ、伊豆はこね、しなの戸がくし、出羽のはぐろ、そうじて日本國のこる所なふ行ひまはり、さすが猶ふるさとこひしかりけん、都へ歸り上りたりければ、凡飛鳥をも祈り落すほどの、やいばのげんじやとぞ聞えし、

〔川角太閤記 五〕太閤樣は播州一國一城に候、西は大敵の輝元をかゝへ、明智はおこり出候へば、太